ふみの会ニュース

■発　行　ふみの会広報部
■発行日　2007年8月4日
■連絡先　藤川博樹
〒115-0045 北区赤羽1-48-3-203
有限会社マイクロデザイン内
tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
■編 集　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.307

9月行事日程

■ニュース編集
原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5枚（2000字）
小説：10枚（4000字）目安

■締め切り
2007年9月20日（木）

■購読料・年会費
1200円（年）
郵便振替：
00170-1-18290 ふみの会

ソニー専用SonicStageとiTunesの画面、ニューウォークマンNW‐E013

♪残り少ない人生のための音楽ライフ♪

■十代のころから集めたカセットやLPレコードが私の音楽ライブラリでした。このライブラリを生かすために私はMDプレイヤーとMDを大量に買い込みました。しかし録音作業はいろいろ面倒です。こんな作業で時間をつぶすよりも、まだ使えるカセットを聴いていたほうがましに思えるくらいです。人生八〇年として、残された時間は二〇数年。その大事な時間を録音作業でつぶすのは愚劣です。それで私はその作業をすっぱりやめてしまいました。■古いライブラリの復活を諦めた私でしたが、もっと簡単で便利な音楽ライフを見つけました。あまり信用せずに試していなかったMP3を中心にした環境です。きっかけは友人からもらったMP3が1000曲ほど入ったDVDです。それを聞いてみると、私の耳が鈍いのかもしれませんが、ポピュラー音楽を聴く程度なら十分の音質です。そこでカセット・LPのライブラリに見切りをつけ、MP3で新しいライブラリを再構築することにしました。■古い楽曲でも、そこそこ知られた名曲・名盤ならCDになっています。図書館で借りる・レンタルCDショップで借りる・中古CDショップで探す、でたいてい手に入ります。なかったら新品で買うか、注文します。そして専用フリーソフトで片端からMP3に変換し、外付けハードディスクに溜め込みます。CDで手に入らなかったら、最後の手段はネットです。ほとんどの楽曲がMP3になってネット上にあります。それはびっくりするほどです。法的には問題があるのかもしれませんが、やむをえません。これをダウンロードすれば通信料のほかは無料です。■MP3ライブラリの曲はデスクトップ、ノートパソコンでいつでも即時に聴けます。そして日常的にはいわゆるMP3プレイヤーで聴いています。このMP3プレイヤーは一度使うとやめられません。私が使っているのはソニーのニューウォークマンNW‐E013（1G・八千円）です。これに約300曲、CDにして15枚～20枚が入ります。使い勝手や容量には若干不満がありますが、iPod shuffleよりは多少ましです。USBメモリーとほとんど同じサイズで音もよく、まあまあだと思います。うちでボーっとしている時、散歩する時、旅行中、はたまた台所、トイレの中、どこでも音楽と一緒です。もっと早く知っていればなあ、とは思いますが今の音楽環境は充分私を満足させています。（N）

リノの風 ④

蒲原　ユミ子

お弁当も食べ、夕方までさがしまわったけれど、二人はタロに会えなかった。

棒のようになった足で、念のために道場によってみた。

すると、タロが小屋の前でちぎれんばかりにしっぽをふっている。リノは走ってタロに飛びついた。先生によると、

「昼過ぎに帰ってきたのだけれど、泥だらけで腹すかせてやせていたのでタロとは思わなかったくらい」だったそうだ。

リノはたっぷりタロとじゃれ合い、満足してからマンションへ帰った。

夜の9時。

リノは風呂に入ると、きょうは早々とベッドに入った。さすがのリノもつかれたのだ。枕もとのスタンドを消そうとしたら、アヤが話しかけてきた。

「リノ。いいもの見せてあげる」

「ん？」

「ママにはひみつだよ」

ママはまだスナック「モモ」にいる。これからが稼ぎ時だ。

「なによ」

「ひみつの約束、守れる？」

リノはつかれていてめんどくさかったので、「いいよ」と言った。すると、アヤはもったいぶって1枚の写真をリノに見せた。見たことない男の人が写っている。リノはきょうみないのでスタンドを消し、タオルケットを引き上げた。アヤはリノに聞いた。

「これ、だれだと思う？」

「さあ」

リノはもうまぶたがくっつきそうだ。アヤはリノの耳元に口をよせてささやいた。

「パパ」

「ん？」

リノは重いまぶたを上げた。アヤはなんでもないことのように言った。

「だから、あたしたちのお父さん」

「ええっ！」

リノの眠気がふっとんだ。

リノはベッドの上に起き上がり、パパだという人の写真をしげしげ見た。スポーツ狩りの応援団長といった感じの人だ。アヤが横で言った。

「少林寺拳法の先生に似ているでしょ」

「えっ」

リノは、（どこが？）と思った。拳法の先生は細身で眼光鋭くサムライふうだが、この人はがっちりした体育系だ。それよりも不思議だ。

「どうして、この写真をもってるの？」

アヤは思わせぶりに言った。

「ヒ・ミ・ツ」

そして、リノに顔を近づけて、ひそひそ声で言った。

「きょう、リノにタロさがしをつき合ったかわりに、こんどはあたしにつき合ってもらいたいことがあるの」

「何よ」

「パパが今すんでいる家を見に行くの」

「ええっ！」

「神奈川県H市よ」

リノたちのいる町から電車を乗り継いで片道だけで、半日はかかるだろうか。いや、距離よりも、リノはパパそのものにぴんとこない。だって、ずっとママとアヤと3人で暮らしてきて不自由してないもの。

小さいころ、お父さんのいる子がうらやましかったこともあるけど、もう今はすっかり三人暮らしになれている。ママは、さっぱりしてるけど優しい。いざという時は、度胸があって頼りになるし。

気乗りのしていないリノにアヤがささやいた。

「パパは再婚しているのよ」

「ええっ！」

だったら、よけいに会いに行って

もしようがない。リノはアヤの気持ちがさっぱりわからない。

「お姉ちゃん、一人で行ってくれば」

「一人旅は、ママがゆるしてくれないわ」

リノは疑い深そうにアヤを見た。

「ママにはパパに会いに行くとはいわないんでしょ？」

アヤはもちろんという顔でうなずいた。

「ずっと前、ママにパパのことを聞いたら、もっと大きくなったら教えると言ってそれきりなのよ」

「ママは、いそがしいもんね」

「だから、自力で調べたのよ」

「ふうん」

アヤは大人みたいな行動力がある。リノはアヤにはとてもかなわない。

結局、リノは、夏休みに入ってすぐの土曜日にパパの入る町へ行くことを約束させられた。

その日は、朝から太陽がまぶしいほどぎらぎら照りつけていた。

きのうは花金で寝るのがおそかったママは、パジャマ姿のまま玄関で言った。

「熱中症にならないように、水分をしっかり補給してね」

「はあい」

リノとアヤの声がそろった。二人は帽子をかぶり、リュックサックをせおい、この間のタロさがしと同じ格好だ。といっても、リノは麦藁帽子に短パンすがた。アヤはおしゃれな白い帽子とニッカーボッカ風のズボンだ。このごろは顔つきもだいぶ違ってきているからちょっと見には双子には見えない。

おにぎりやおかずは自分たちで作った。夏休みの自由研究を「山手線」にしたので、きょう一日山手線乗り放題をゆるしてもらった。山手線には乗るけれど、宿題はこじつけだ。

電車に乗ってから、リノはもう一度アヤに聞いた。

「パパの写真、どうやって手に入れたの？」

ずっと前から、きょうの「パパの家ほうもん旅行」をもくろんでいたらしいアヤは、実行できて嬉しいのか、笑って教えてくれた。

「ママの友だちのサキさんからよ」

サキさんは、ママの学生時代からの友だちだ。ママがスナック「モモ」を開店したときも、過労で入院したときも駆けつけてくれた。

「じゃあ、パパの今の住所もサキさんから聞いたの？」

「まあね」

アヤは得意そうにうなずいた。

電車を3つ乗り継いで、H市についた。

ここからバスに乗って8つ目にパパの家がある。しかし、もう十二時を過ぎたので、リノは腹がすいてきた。

「バスに乗る前に、駅前広場でお昼を食べようよ」

すると、アヤがかたい表情でリノを見た。

「じゃあ、待ってるからいそいで食べるのよ」

リノは噴水の前で食べたかったが、アヤに遠慮してすぐ近くにあるベンチにすわり、いそいでおにぎりを2こ食べた。

（おかずとおやつは、あとで食べよう…）

リノが食べ終わると、すぐバス停に行った。ちょうど、バスがいた。

ここまで、本当にスムーズに来れた。アヤがインターネットでくわしく調べておいたからだ。リノはただアヤにくっついて来ただけだ。

でも、バスに乗ったら、さすが能天気なリノも少し緊張してきた。

パパはどんな家に住んでいるのだろう。再婚した女の人はどんな人かなあ。子どもはいるのかなあ。

わたしたちを見たら、自分の子だってわかるのかなあ。

アヤの計画だと、きょうはパパの家を見るだけだけど、もしばったり会ってしまったらどうしよう。逃げるわけにいかないし、パパが気づいたら何と言ったらいいだろう。

気づかれてもこまるけど、リノたちを見てぜんぜん気づかないというのもさびしい。どちらもいやだ。

お姉ちゃんはどっちがいいのだろう。どうして、こんな苦労をしてまでパパの家まで行くのだろう。

リノは隣にいるアヤをそっとぬすみ見た。アヤはこわいほどの目で空中の一点を見つめつづけている。

（つづく）

混沌市凡日録　２８

混沌祭り

蒲原直樹

混沌市の夏祭りは近在で最大規模を誇る。人出は土・日の二日で約四〇万人にのぼり、混沌駅周辺には長い出店の列が出来る。ちょうど梅雨明けの時期で、街は夜遅くまでけだるい熱気に包まれるのだ。

門倉琴絵がダブルデッキの下に手話サークルの模擬店を出し始めたのはもう一〇年も前のことで、最初はヤキソバの店だった。それが印度餃子ソモサを経てタコヤキになり、五年が経った。ヤキソバの頃は苦労のわりに儲からない印象だったが、タコヤキは利益があがった。一日の売り上げが五万、二日で一〇万になり、もろもろの経費と実行委員会への上納金を引いても六万円の利益になった。この金額は大きく、今ではサークルの主要な運営資金になっている。

琴絵の手話サークルは専業主婦ばかり三〇人ほどが参加しているが、模擬店に賛成しない人もいるし高齢化も進んで、店を切り回してくれる人の数が減ってきた。杉戸市の友人から鉄板とガスボンベを借り、混沌市場で粉やタコなどの材料を仕込み、友人の勤める市内の小学校から机と椅子を借りてくるのもみんな琴絵と彼女の夫の二人でやっていた。ヤキソバの頃はこのほかにテントも借りていたが、運搬・組み立てに男手が必要なのとダブルデッキの下は雨に当たらないのでこれは省略することにした。かわりに幟り旗と横断幕でエリアを区切った。

店はタコヤキの作り手と売り子に別れる。時々交代することもあるがそれぞれに才能というものがあり、うまい売り子は売り上げが違った。琴絵は作る方が得意で昼前から夕方まで七時間くらいを鉄板の前で過ごした。真夏の熱さとガスの熱気の相乗効果で大量の汗をかき、ペットボトルのお茶と缶ビールの合計数リットルを飲んでもトイレに行く必要がないくらいだった。

祭りの打ち上げは楽しみだった。熱気で水分の抜けた体に冷たいビールがしみた。逆に残念なのは模擬店にかかりきりで祭りの全体像が見られないことだった。

「今年は交代してもらって、西口と東口をぜんぶ回ってみよう」

琴絵はそう決心した。

ところが、手話サークルでトラブルが起こった。それはもともと模擬店に協力的でなかったグループのクーデターのようなものだった。

「社会的に有意義な活動を目指しているのに、儲け本位のくだらない模擬店営業はサークルの品位を落とすだけ」

そう主張して彼女たちは模擬店参加を拒否した。

「Ｏ１５７の問題もある時に食べ物なんか売っていいの？」

「保健所で検便を受ける義務があるのに、受けていない人がいる。それって違法でしょ？」

反対グループはそんなことも言った。たしかに売り子の中には検便をやっていないメンバーもいた。しかしそういう人は作り手には加わらない建前だ。殺菌消毒も薬剤と洗面器を用意して保健所の規定どおりにやっている。駅前通りに並んでいるテキヤの屋台では洗面器を用意していない店もたくさんある。彼らはお金を扱ったりトイレに行ったりしても手など洗っている様子はなかった。彼らに比べればサークルのメンバーは厳密にやっている。琴絵はそう主張した。しかし議論は平行線だった。会長は持ち回りで、たまたま反対グループの長老がやる年にあたっており、おかげで祭り参加の正式承認はおりなかった。手話サークルとしての参加ができなければどうするのか、考えていなかったので琴絵たちは途方にくれた。

「こうなったら有志参加でいきましょう」

メンバーの一人がそう提案した。ほかに方法はなさそうで、琴絵もそれに賛成するしかなかった。

七月、祭りが近づき門倉夫婦は行動を起こした。鉄板とガス、机と椅子を手配し、買い物リストを作って市場へ買出しに出かける、横断幕・立て看・幟り旗・サークルの宣伝ビラを準備する、手分けしてタコと野菜を細切れにし、ビニール袋に詰めて冷蔵する、申請書を提出して駐車許可証を貰う、保健所に出かけて検査済み証を貰う、それだけのことをやり切るとやっと一段落だった。

祭りの当日になった。午前中に雷を伴う激しい雨があり、それが上がった後は一段と蒸し暑くなった。ダブルデッキの両端でイベントが始まり、大きな音が流れ始めた。一方はブラスバンド、一方は素人ロックバンドの演奏でともに耳をつんざく大音響だった。演奏が始まるとどっと人出も増え、祭りらしくなってきた。

琴絵はガスに火をつけ、鉄板に油を引き、水溶きしたタコヤキ粉を流し込んで焼き始めた。隣にいる作り手の一人が手早く大雑把にキャベツと紅ショウガとタコの切り身を投げ入れる。粉が焼け始めると千枚通しに似た針で周囲のバリを削って穴の中へ掻きこむ。そして穴の中で焼けている半球をうまく突付いてクルリと引っくり返す。この一瞬がタコヤキ作りのキーポイントだ。五年もやっているとこのコツがつかめて、快感になってくる。

タコヤキが焼けた頃にプラスチック・パックをつかみ、二個づつ針に突き刺して詰め込む。十個詰まったパックをテーブルに並べると、売り子は刷毛でソースを塗り、小さじで鰹節の粉・青海苔をふりかけてタコヤキの間に爪楊枝をはさみ、輪ゴムでパックの蓋をとめる。一パックが二百円売りだ。この値段でも大きな利益が出るのだが、テキヤのタコヤキは三百円・四百円で売っている。大きめサイズとはいえ、コストのかかるタコやキャベツはあまり入っていない。琴絵には彼らの上げる莫大な利益の想像がついた。

タコヤキ販売が始まった頃に顔見知りの実行委員会役員が視察に回ってきた。琴絵が挨拶する。彼は琴絵の耳元で、

「今朝スガイさんが事務局に来てね、あんたたちが手話サークルの正式代表じゃないから営業許可を取り消してくれ、って申し込んだんだよ」

「まあ、ホントですか？」琴絵は目を丸くした。須貝成美は反対派の手話サークル会長だ。

「わたしゃね、事情を聞いてるから断ったよ、反社会的団体は別だが、お祭りなんだから参加してくれる市民は誰でも歓迎するってね」

役員はほがらかに笑った。琴絵はありがとうございます、と言って頭を下げた。そして反対派のえげつなさに呆れた。

（あんな人たちのためにサークル資金を稼ぐなんてバカらしい、今回の利益はパッと使っちゃおうかな……そうだ、打ち上げは自己負担なしにしよう）

琴絵は決心し、気楽になった。彼女は仕事を早めに譲り、缶ビール片手にお祭りの風景を眺めて歩いた。西口では「ねぶた」が練り歩いていたが、商工会が一〇〇〇万円で青森県に特注したというのに本物の十分の一くらいのちゃちな代物で、市民の批判をあびていた。琴絵も、

「あれなら中学生にでも作らせた方がマシだね」と笑った。

ほかにもブラジル風のサンバ、阿波踊り、よさこいソーランなど、それぞれは頑張っているもののどこかしらバチモノくさい出し物が並んでいた。琴絵は苦笑いしながらもそれぞれを楽しんだ。そしてお祭りの本当の主役は、浴衣を着て綿飴やイカ焼きを食べながらキャーキャーワイワイ騒いでいる子どもたち、若者たちだと思った。

（あたしも子どもの頃は、お祭りというと眠れなくなるくらい興奮したもんだ。今の子どもたちは醒めているっていうけど、きっとそれなりに楽しくて興奮して胸が騒いでいるのかもしれない）

自分にはもうあの頃のような気持ちはなくなってしまったが、今の子どもたちを楽しませるために出来るだけのことをしてやろう、琴絵はそんなことを考えながらダブルデッキの下のタコヤキ屋台に戻った。そして、どんどん増えてくる人波に向かって、

「さー、出来立てアツアツのタコヤキだよ、十個でぽっきり二百円、買っていきな食べてみな、安いよおいしいよーッ」

と叫んだ。

わたしの大学生活（3）

ふじみ　ちよ

初の大舞台、ジョイントコンサート２００７が終わった。大学合唱団の一員として活動してきた3ヶ月間の集大成。自分の成長を大いに感じられる結果となった。

落ち着いた今思い返してみると、何ともバタバタした3ヶ月間だった。入部して間もなく「ジョイントの合ステに乗るか乗らないか」という、新入りのわたしにとっては意味不明の暗号のような質問を何度もつきつけられ、「乗」って損はないだろうという安易な気持ちで「乗ります」と答えた。6月の大阪府合唱祭を何とか終えたあとは先輩方の中で「ジョイントまであと1ヶ月や～」といった緊張感が見られ始めたが、わたしはその時もまだ「ジョイントって何?」状態。波に乗れてない。先輩に詳しく聞けよ！　と思われるかもしれないが、呆れることにわたしには先輩に聞くに至るまでの危機感がなかった。そういうわけで、状況がわからないだけに余計に日々が慌ただしく感じられていた。

その「ジョイントの合ステ」すなわち「ジョイントコンサートの合同ステージ」の練習に参加し始めた頃に、わたしは初めて「ジョイント」の重大さに気づいた。わたしたちが参加するジョイントコンサートとは、大阪府にある4大学の合唱団が合同で行う演奏会だったのだ。参加人数合計約２００名。「ジョイント」なるものはどこの大学合唱団も経験するものだが、２００人で行う大規模なものは異例らしい。

コンサートは各団の単独ステージと4団一緒に行う合同ステージで構成される。合同ステージの練習に参加しておったまげた。公共の施設を貸し切りにして集まったすごい人数の合唱団のみなさん。ホールに充満しているただならぬ緊張感。みなさんの歌のうまいことうまいこと。指揮者の先生、ピアノ伴奏者の先生は共にプロ。そこにポツンと佇む、歌う歌すらまだロクに知らないわたし。明らかに場違い。参加してよかったのかと不安が押し寄せる。周りをよく見ればうちの団で参加する1回生は9人中たったの3人。みんなも合ステが何のことかよくわかっていなかったらしく、「乗らない」と返事したらしい。そうだよ～、何かよくわかってないものを気安く引き受けるもんじゃないよ！（笑）。

こんなグダグダな状態だったわたしだったが、練習を重ねるにつれて自分なりに周りの状況を読み取れるようになった。「ジョイントコンサート」の全体像がぼやけてはいるもののイメージできるようになり、自分がそこに参加する合唱団のメンバーであることがしっかりした実感になってきた。このあたりでようやくわたしも「ジョイントもうすぐや～」といった緊張感が出てきた。

危機が訪れたのは本番が1週間後に迫った合同練習。そこで指揮者の先生から突然の全曲暗譜命令が下された。楽譜持ち込みはＯＫだったはずでは!?　1週間前にいきなりそりゃないよ～……、と少し沈んだ。単独ステージでは外国曲9曲全曲暗譜命令がかなり早くから下されていたので心の準備はできていた。9曲のうちの指鳴らし付の曲1曲のためだけに全曲暗記は少し納得いかなかったけど、入部当初から歌ってきた

曲だしなんとかなるやろう、という気持ちだった。でもそこに合同ステージ曲5曲追加となると……。しかもその時は大学の試験前。もう何も覚えられましぇん。脳内ホテルの支配人も言い放った。「只今満室でして」と。

だけど「無理です」なんて言いたくなかった。言ってはいけなかった。わたしは腹をくくった。脳内ホテル支配人に「相部屋でもいいんで……」と頼み込んだ。もうやるしかないんだ！　楽しい試練だと受け止めてやってみよう！　と決意。それからは長距離通学を利用して電車・バスで楽譜とにらめっこ。小声でひたすら歌うわたし。ヘンな子だと笑ってください。学校では自主練で先輩に音程を取っていただき、あとはひたすら音源を聴いた。するとどうだろう、情けない場違いアルトだったわたしが、先輩方と肩を並べ楽譜を閉じて歌えるまでになったのだ！

そして迎えた本番当日。史上最大といわれた台風もどこへやら、すがすがしい1日の始まりだった。夕方5時半の開演に備えて朝11時過ぎにホールに集合。リハーサルもあっという間に終了しついに開演。600人～800人のお客さまがお越しくださった（ホール調べ）。

緊張はしていたけどオープニングで学歌を堂々と歌い上げたあとは、心から歌うことを楽しめた。単独ステージは、200人だったオープニングから一気に26人に減った（うちの団は4団中で最小勢力）ので、舞台がスースーしたけどその分密度の濃い演奏ができたと思う。練習した指鳴らしも、両手共に好調で気分が良かった。大阪府合唱祭では味わえなかった達成感があった。

そしてラストの合同ステージ。言葉にできないほど感動、興奮した。暗譜できたことに対するうれしさも大きかったけど、それ以上に違う大学に通う人たちと同じ舞台で、こんな大人数で歌えることはこんなに気持ちのいいことかと思った。今回歌った曲はとてもメッセージ色の濃いものだった。指揮者の先生が練習のたびに、歌詞から引用して強調しておっしゃった言葉、「夢を見るの」「未来をつきとめるの」「踊るの。踊れるんだよ」それらを心に留めながら、楽譜上のメッセージをもう一度みんなでつくりあげて、聴いてくださった全ての人に飛ばすことができたと感じる。ホール内全体に大きなエネルギーの流れを感じたのは、きっとわたしだけではないはず。

歌っているときにたとえようもない感情が湧きあがって、涙が溢れてきた。終了後には、ひたすらに頑張った先輩方の涙があった。1年以上も前から準備をされてきた先輩方の苦労は計り知れない。多忙極める中、初心者であるわたしたちにいつも優しくご指導くださった先輩方には感謝の気持ちでいっぱいだ。そして、いつも「お金のかかるクラブ」と嘆いていた母の涙があった。「ごっついよかったで」と言ってくれた。いろんな人に支えられて、わたしはこの日すばらしい充足感を味わうことができたんだと強く思う。

思い返せば本当に、あの時「乗ります」と返事をしてよかった。時にはもがいたりもしたけど、単独ステージだけでは決して味わうことのできなかった幸せな気持ちをいただいたと思う。何か大きなことをするには犠牲が伴うけど、「案ずるより産むが易し」だ。何でもとりあえずやってみる。あとは自分の努力と要領と、手を差し伸べてくれるみんなの力を借りること。これからの指針になりそうな名言だ。今、3ヶ月前には手の届かなかった「自分」に会えている気がする。よし、この調子だ。まだまだ成長していこう。

沖縄の思い出②

多村喜木子

夏休みに入り数日後に出発を控えた晩、居間でテレビを見ている両親に「沖縄へ行く」と報告した。両親は驚き、急すぎると怒っていたような気がする。あまり詳しく覚えていないのは、親の反対や忠告など聞く耳を持たず、この一瞬を我慢したら良いとばかりに西表島のことばかりを考えていたせいだ。

出発の日、父が車で伊丹空港まで送ってくれた。母よりも父と仲が良かったが、車中では出発する私を気遣ってくれたのか心配や小言もなくありふれた雑談だった。そしてバイトに行くというのに小遣いをくれた。

その頃から十数年経った今では親の気持ちが少しはわかるようになったが、当の私は父親から借りたカメラがちゃんと動くのかとそればかり心配していた。頭の中は西表島への期待でいっぱいだった。

一人で飛行機に乗るのも乗り換えをするのも初めてだった。特別な場所に一人で行くということが十七歳の私にはとてつもなく誇らしいことに思えて、物怖じすることなく順調に本土を離れていった。

当時は伊丹から石垣島への直行便などなかったので、まず那覇で石垣島行きに乗り換える。那覇空港の搭乗待合室では親しげに話す地元の人や観光客ばかり。それまで意気揚々としていた私もさみしくなったというか手持ち無沙汰になり、ウエストポーチに持参した星新一を読んだ。従姉に一冊もらって以来、ショートショートを気に入って何冊も集めた中から内容を忘れていそうで分厚いもの を選んで持ってきた。

石垣島へはバスのような小型飛行機で約50分かかった。窓の下に見えるエメラルドグリーンの海が島の周りだけは色がグラデーションになってきれいだった。

飛行機を降りるとすぐ脇に小さな手荷物受取所があった。地元の人が沖縄や本土で仕入れてきたであろうダンボールやカゴに詰めこんだ荷物や観光客のダイビング機材とともにベルトコンベアーで運ばれてきた鞄を取り、「沖縄離島情報（先生に借りたものではなく最新版を自分で購入した）」で何度も下調べをしてきたとおりタクシーで離島桟橋へ向かった。その道の両脇には背の高い椰子の木が風でユラユラと揺れていて、やっと来た！ と心の中で叫んだ。

離島桟橋から西表島へは船に乗る。「沖縄離島情報」を頼りに見つけたチケット発券所で西表島行きの切符を買った。小浜島や黒島行きなど大小様々な船が並んでいるなか、想像以上に小さな船に乗り込み、この旅で初めての一枚を船を運転するおじさんに撮ってもらった。服装はその頃流行のDCブランドの黒いポロシャツに白いスカート、足元はルーズソックスとスニーカー。疲れと暑さで意識がモウロウとする中、Tシャツよりも生地の厚いポロシャツを着てきたことを後悔したのを覚えている。

地図で見ると石垣島より横幅が広い西表島には港が数ヶ所あり、私が向かった大原港は比較的静かな港で、屋根も椅子もないスペースに迎えの車や人が到着を待っていた。その中から焼けた肌に大きなお腹の60歳ぐらいのおじさんが笑顔で歩み寄ってきて「いらっしゃい」と迎えてくれた。

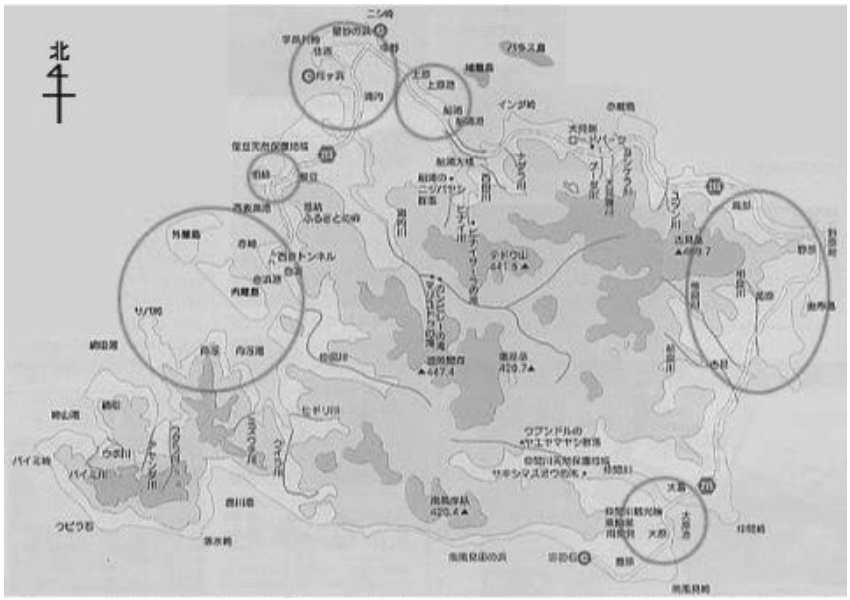
南風荘は港から10分ほどのところにある大原という町の端にあった。鉄筋コンクリート二階建ての建物は、ハイビスカスやアセロラなど濃い緑

で囲まれて道路から見えないほどだった。喫茶店のようなガラスのドアから中へ入ると、小さくて細くて笑顔がかわいいおばさんが温かく迎えてくれた。確か……お父さんとお母さんと呼んだらいいと言われたような気がする。名前は忘れたが犬も一匹いた。

一階には小上がりの座敷と喫茶カウンターと台所。座敷は食堂でもあり、仕事の合間にテレビを見たりくつろぐ場所でもあった。喫茶カウンターにはレーザーカラオケがあり、夕方から近所の人や宿泊客が来てカラオケスナック（と呼べるかわからないが）になった。

二階は客室とシャワー室とトイレ。私はこの客室のひとつを与えられた。四畳ほどの和室にテレビと冷房と押入れのように布団を収納するたんすがあった。テレビと冷房はコイン式だったが、お母さんがお金を入れなくても動くようにしてくれた。屋上には物干し場があり、数日後から小麦色を目指す私の昼寝場所になった。

着いたその日は玄関周りの掃き掃除をしただけで夕食の時間になった。


北
ニシ崎
学島灯台
星砂の浜
小野
ブタバナ
ブタバナ浜
住吉
上原
浦底島
浦底
浦底湾
インガ崎
赤崎鼻
大見崎
ロードパーク
ジャングル
ブリッジ
ヒルギ川
浦底大橋
浦底の
ニシバラン
群落
ビティ川
ビティ
ビティ川
ビティ川の滝
ビティ川の滝
ヒルギ川
ヒルギ川
ヒルギ川

小説　パンドラの箱

藤川博樹

第三章　吉村君が踵の高い靴を履いたこと

津田君の紹介で彼の大学の友人の吉村君がやってきた。吉村君は大学の文学部の四年生で、卒業論文で島崎藤村に取り組んでいた。やはり津田君と同じ大学の友人の高橋君もアルバイトで働きに来ていて、吉村君も含めて卓球場でよく卓球をやった。

常三は、受付でない書籍編集長の方の津田さんに呼ばれて、配置換えを言い渡された。出版不況のこと「有名な筑摩書房でさえ倒産したのだから」体制を縮小せざるを得ないという話。出版社に入るときには総務の橋田氏に編集部での採用を約束された常三だったが、受付に配転になる話は編集長の津田さんからだった。

津田さんは常三が夜通っている文学教室の講師だった。津田さんが教室の六回目の講義に来て窪田精の「海霧のある原野」を題材に取り上げた。五回目までの講師がそれぞれ文学的な情熱を熱く語る内容だっただけに、文学的に語るというよりも作品の社会的意義を語りすぎ、津田さんの生真面目な人柄もわざわいして講義は低調であった。教室が終わった後みんなで喫茶店に寄って津田さんも来た。鴨志田君が「今までで一番つまんない講義だったな」と講師の目の前で良く言うよという感じでしゃべって、津田さんは「そうですか」と照れるでもなく恐縮していた。そういうわけで、津田さんは常三のことを知っていて、その縁で編集長の津田さんから常三に直々に話があったのだ。

常三はまた受付に戻った。残業で遅くなる編集部とは違って、受付は夕方五時には必ず帰れるので、気楽ではあった。夜の文学教室には必ず出席できる。

受付の方の津田君は、いつも自分の地域での活動のことの不満を述べていて、俺やめようと思うと言っていた。「本人のやりたいようにさせてやればいいのに、どうしてその人がやりたいことをやらしてやらないんだ」というのが津田君の意見だ。その人は写真が好きでいつも山へ行って写真を撮っていたのにみなに批判されたという。選挙や活動月間がこのように多くては趣味などやっている暇はないということなのだ。

そして、受付の津田君は、人の紹介で新しい会社に移っていった。常三の後に受付のアルバイトをやっていた法政大学の蟹江君は首になり、常三はまた受付に戻った。吉村君とは一日中受付に並んでいろんな話をした。編集の経験のある常三は頻繁に文化評論の校正に駆り出された。文化評論は月刊誌なので、締め切り後の追い込みが大変だった。翌々月号の企画と、翌月号への著者への原稿依頼、当月号の編集・校正と同時進行である。忙しい編集部の代わりに代々木や石神井公園や所沢の喫茶店に原稿を受け取りに行った。著者の一人は岩波新書の『火縄銃から黒船まで』という本について語り、「知識人の蛸壺化状況を打ち破らないといけない」と盛んに力説した。雑誌の著者との出会いはどれも一期一会なのだが、よい経験になった。多くの著者とは「また会いましょう」と言って別れて、それきり一度も会う

ことは無かった。

吉村君は、有田君に誘われて同世代の仲間と関西方面に旅行した。そこで知り合った加藤さんにさかんに手紙を書いていた。その文章を常三にも読んで聞かせてくれた。旅行中に一緒に京都の坂道を上って行ったことなど、聞いているものには何の変哲もないことを書いている。それでいて吉村君は大まじめなのだが、読みながら「こんな文章、他人にとっては何の意味もないことなんだろうな」と覚めたセリフを言ったりしている。同じ景色も、同じ建物も違って見える瞬間がある。同じ出来事も深い意味を持って感じられることがある。それが生きていることの意味なんだよと今の常三なら吉村君を励ましてあげるところだが、そのときの常三はただ聞いて笑っているだけだった。京都の加藤さんから一、二度返事がきたきりでその件は終わってしまった。その同じ加藤さんつながりでもないだろうが、今度は営業部にアルバイトで働いている加藤さんを好きになった。加藤さんも含めて仲間でよく新宿の区役所前通り当たりに飲みに行っていた。そして加藤さんは吉村君をきらいではなかったようなのだが、残念ながら加藤さんには前から好きな人がいて、その人は学者なのだが結婚しているのだ。吉村君はさかんに加藤さんを飲みに誘い、加藤さんはしきりに学者に電話をかけたり研究会に参加したりしていた。この三角関係の苦しさは吉村君にとっては耐えがたかったがどうすることもできなかった。

ある時吉村君と卓球をしていて、どうも違和感があったので言ってみた。「おい吉村、お前背が低くなったな」背が低くなったのではなくて、これまで吉村君は踵が高い靴を履いていたのを普通の靴に変えたのだった。

野　球

中井　豊

小学生になるまでは、運動やスポーツについて、その存在すら知らなかったように思う。おそらくテレビによって知ったのではなかろうか。

テレビの本放送が始まったのは一九五三年二月というから、四歳の時である。それから数年で、田舎の食堂などでもテレビを見ることができるようになった。見たのは相撲や野球だった。子供達は食堂に入り、何も注文せずにテレビを見ることができた。そんな時代だった。

小学校三、四年生の時分は、休憩時間はもちろん、放課後も寸暇を惜しんで軟式野球をやった。どこが主催だったのか単なる催しだったのか想像もつかないが、町内地区別の少年野球大会もあった。

当時のプロ野球には、セントラル・リーグに国鉄スワローズ（ヤクルト・スワローズの前身）というチームがあり、背番号34をつけた金田正一投手が活躍していた。

国鉄スワローズを応援するようになったのは、国鉄職員だった父の影響だと思うが、いつも下から二番目だった弱いチームにあって、金田投手は強い巨人を倒す痛快な名選手だった。さまざまな大記録を保持している筈である。

生来は右利きだった私は、左腕の快速球投手を目指して左投げの練習をし、打つ方も左に換えた。そして、グローブを右手で使い、ネットの部分に「34」とマジックで大書して捕手のなり手を探してはボールを投げた。

足腰は強い方だったし、腕力もあったから球は速い方だった。しかし、コントロールはよくなかった。それ

で、主に一塁手をやりながら、試合の途中から投手をやった。ガキ大将の我儘だったかも知れない。それでも調子の悪い時は自ずと交替することになるから大丈夫だ。

昔も今も、私の関心は打者より投手に向かう。魅力は投球フォームである。よい投手はフォームが合理的で美しい。むろん打者にも同じことがいえる筈だが、私には判らない。

最盛期の金田投手の投球フォームは実に美しかった。少年雑誌には、彼の投球フォームの分解写真が掲載されたことがあった。彼の投球を実際に見たことはないのが残念である。

父に連れられて球場での試合を見に行った時、ブルペンで巨人の別所毅彦投手が練習を始めた。その時も、投球フォームの美しさに目を奪われ、試合の方を忘れて眺めてしまった。

中学生に入る時に転校した私は、早速そこの野球部に入った。小学校の友達からも「野球部へ入ったか？」といった便りが頻繁に届いた。しかし、先輩の練習を見ながら声を出したり球を拾ったり、ユニフォームを洗濯したりすることが主だったし、同じ一年生の仲間とも衝突することが多く、永続きしなかった。

野球部をやめてから、いつしか興味は他に移り、野球のことは関心の外になってしまった。それでも投球することは好きで、高校一年の頃も、試験前になってグランドが空くと、友人とキャッチボールをして、カーヴやシュートを投げて楽しんだ。硬球は変化球が投げやすいので面白かった。球速のせいか、一度だけ野球部に誘われたこともあった。

どうやら私は投球することが楽しかったので、野球という勝敗を競うゲームに魅力は感じていなかったらしい。野球に限らず、ものごとには勝ち負けがある。だからこそ面白いのである。しかし、負けると意味がなくなるようなことに励む気になれなかった。

五年ほど前に星野仙一氏が監督を引き受けてから、阪神タイガースが強くなった。それで、夕食の後は、ほろ酔い気分で阪神タイガースの試合をテレビで欠かさず見ている。見る場合は、関西のチームが勝たなければ面白くないのである。

いつしか、努力感の伴わない娯楽はプロ野球観戦のみになってしまった。数学や語学はもちろん、音楽にせよ、作文にせよ、登山にせよ、読書にせよ、私には娯楽にならない。

最近は、平気で天下りする官僚などより、ファンあってのプロ・スポーツだということを肝に銘じてプレーする人達の方が人間として上等な気がしている。この世界にもダーティな部分はあるだろうが、損得ばかりの企業や保身に汲々としている公務員の世界などより嘘が少ないのではないか。

ところで、現在のプロ野球で最も魅力ある投手は阪神タイガースの藤川球児投手だろう。

彼がマウンドに立つと、独特の雰囲気が球場全体に漂う。勝ち試合の九回になって登場する場面が殆どだが、一球ごとに深く息を吸い込んで姿勢を正し、祈るように精神を集中して投げ込む。直球が主だと判っていても大抵はバットに当たらない。見る者は一球々々を見逃すまいとさせられる。大したものである。

スポーツに美を見出して喜ぶ人は多いだろう。否、ほとんどの人達は美を楽しんでいるのではないだろうか。

小説・一人ぽっち

内田幸彦

（二六）結　婚

彦一はいきなり商売の道に飛び込んだが、独身では信用がない。結婚して所帯でも持てば世間の目も違うだろう。自分自身に重荷をかけることによって、最後の手段の商売を完遂せねば生まれたこの地ではいられない。結婚して社会的信用を得、自分自身も責任を負おうと心に決めた。

彦一の決心が神に通じたのか、彦一を取り上げた産婆さんから縁談が持ち込まれた。菓子問屋の娘さんで三つ下。偶然、小学校の頃、珠算学校で一緒に習った事がある娘（こ）だった。その娘自身に文句はなかった。が、先方の言い分が気に入らなかった。

「貰ってくれれば商売の資金を出させてもらう」

これがカンに触った。一人前の男を掴まえて最初から資金援助するとは、《馬鹿にするな！》と思った。

「お話は有難いんですが、当分独身で自由を楽しみたいので、お断りします。そりゃ資金は欲しい。だが、金のために結婚するなんて、男のする事じゃない」

《腐っても鯛。男だから他人の力なんて借りるものかッ！》と思った。

それから約一年も経った頃、同じ産婆さんが別の話を持って訪れた。今度は酒屋の娘さんで、近代美人だった。歳が一つ違いなのが気になったが、こちらも贅沢は言えない。条件は、家が自分のものなら、ということだった。身内の手前、結納の飾りは立派にして、中味はどうでもいい、とも言った。産婆さんから彦一の近況を聞き及んでいるのだろう。先方の言うことは理に叶っている。海のものとも山のものとも判らない商売人の所へ来てやろうというなら願ってもない話だと彦一は喜んで承知した。

仲人の産婆さんが急死し、多少混乱はあったが、それから間もない十一月末日、雪の降る寒い日に彦一は結婚式を挙げた。花嫁は前日から風邪をひき、式場で咳と涙と鼻汁に難儀していたのが印象的だった。

あの苦しい生活の中から準備したのだろう、母は結婚式と新婚旅行の費用を出してくれ、彦一は結納の飾りと中味三万円を借金でまかなった。

新婚旅行では花嫁の道子は沈み勝ちで、列車の中でも物を言わず、彦一は苛立った。折角、母が無理してやってくれた新婚旅行なのに、こんな陰気な旅では申し訳ないし、不愉快だった。旅館に入っても、道子は温泉にも行かず、沈んで夕食も摂らない。彦一は苛々し、独酌でグイグイ呑み、《どうにでもなれ！》と一人で温泉に行った。風呂から帰っても、花嫁は浮かぬ顔で黙っていた。

翌日の泊まりは箱根だった。ここの宿で、道子は恐るおそる言った。

「初めてなので、不安で、不安で…」

玄人遊びしか知らなかった彦一は、そこまで気付かなかったのである。

「そうだったのか、初夜から怒鳴って済まなかった。母には苦労をかけるばかりで何もしていない。母にだけは淋しい思いをさせたくないから、俺より母を大事にしてやってくれ。その償いは必ずする」

と言い直した。

旅行から帰って暫く経って、道子

は言った。

「あなたって、親孝行なのね。私も兄弟は多いけど、あなたみたいな孝行な人はいないわ」

大人しい彼女の精一杯の抗議だったのかも知れない。

たった一度だけ、母と道子が揉めたことがある。

母が友達と花見に行くことになった。生まれたばかりの長女が夜泣きして、眠れなかった道子は、その朝ツイ寝過ごしてしまった。母は弁当を自分で作り出したが、馬鹿らしくなって途中で止め、道子に怒り出した。

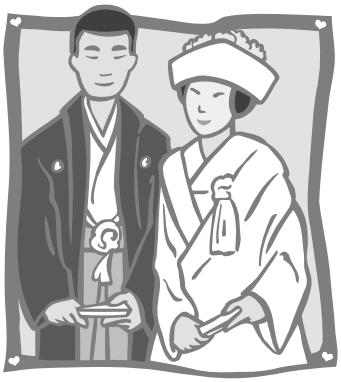
騒がしいので、彦一が起きて行くと、道子は平謝りにあやまっている。母の怒りは収まらないばかりか、ますます激昂した。

彦一は母に向かって怒った。

「道子は謝ってるじゃないか。それを『もう行かない』とゴネるのは、お母さんが悪い。旅行に行かぬと言うなら俺が許さんッ！」

母は道子の作った弁当を持って、やっと花見に出掛けた。以後、道子も母も彦一を見直したようだった。母と同居した十余年の間で、最初で最後の揉め事だった。

貧しい、厳しい商売を三十年余りにわたって彦一が続けられたのは、道子の努力と辛抱に支えられたお陰で、普通の女性では頑張り通せなかったに違いない。



（二七）働けど働けど

彦一は緊張した。妻を得て養う口が一つ増えた。そのうち子供も出来るだろう。追っかけられるような切迫した気持ちだった。

売る商品を集めなければ商売にならない。仕入れても、まだ売り先がない。仕入れなければ売る物がない。仕入れれば月初めに代金を支払わなければならない。支払いを考えると、仕入れもできないのだが、いま手をゆるめれば、やっと顔を知ってくれた矢先なのに商売が停まる。そうなっては一大事。売ってくれれば仕入れるしかなかった。いや、仕入れなければ、また失敗につながる。目を瞑って仕入れ続けなければならなかった。

仕入れれば何とかなる。何としてでも乗り越えねばならないのだ。それが辛い。資金を持ってやっているのではない。月末が来れば生活費、五日には商品代金の支払い。毎日経費が出てゆく。まともに考えれば気が狂いそうだ。無理に忘れて仕入れる。支払う。売れないのだから、金が入る訳がないのだが、……。

そんな生活でも子供は生まれる。長女が出来、長男も生まれた。或る朝、出掛けようとすると、道子は門口で長男・修の手を引きながら言った。

「修も今から幼稚園ですよ」

彦一はハッとして手を引かれている修の顔を改めて見た。何時の間に幼稚園に？　仕事に追われて、子供の成長など考えてもいなかった。

毎日一緒に暮らしているのに、子供が大きくなっているのに気付かず、初めて子供の顔をつくづく眺めた。《何時の間に？　……》。長女・あい子のことから考えれば、七、八年も子供のことは頭になかったのだ。頭になかった、というより、子供の顔を見る間もなかったのである。彦一が驚きのまま、思わず修の頭に手をやるとニッコリ笑って、

「僕、幼稚園へ行くんだ」

と、嬉しそうに笑った。

商売の肥料を、本当は四〇〇円で売りたいとする。支払日が来るし、生活費が要る。そこで、

「三七〇円で」

と、切り出すと、

「三五〇円なら買う」

と値切られる。金が欲しいから三五〇円に負ける。儲けは無くなるか、損になることもあった。苦労も色々多いが、金の苦労は特に辛く、悲しかった。

やっと支払手形がなくなった時、同業者から言われた。

「外田さん、だいぶん儲けましたな。福相な顔になりましたよ」

儲けたのではないことは、相手も百も承知だ。厭味で言っているのだ。

同業者は仲間の商売、懐具合を知り尽くしている。商売仇は憎いのである。口ではお上手を言っていても、肚ではせせら笑っているのが商売人である。

支払手形の期日に手形を決済できなければ、商人の死に繋がる。つまり、倒産である。それだけに、深刻になり、人相も険しくなる。

十日、二十日、月末と、月に三度の支払手形をどうにか切り抜けられたのは、信用金庫へ泣き付き、国民金融公庫と府の事業資金からの融資の受けることを繰り返したからである。

商売始めに、信頼していた友人に借金を切り出し、

「やめておけ。難しいぞ」

と軽く逃げられ、後悔したことがある。以後、個人に借金の話はするものでないと堅く心に決め、お金は金融機関で借りてきた。利息を払うなら、借金する者は金融機関のお客である。利息は値切ることもできるし、借り入れ額も交渉次第だ。

万一借りられたとしても、相手が個人だと、銀行利息以上のお礼をしなければならない。それによって仮に成功したとしても、

「あの人は成功して今は立派になっているけれど、昔はうちへお金を借りに来たのよ」

と陰口を叩かれるのが落ちだ。

遠い親戚の一人から、金額は言わなかったが、金を貸したと言われたことがある。彦一には毫も憶えのないことで、意外なことに動転し、何時？　どこで？　幾ら借りたかを反問せず、数年を過ごしてしまった。どうしても腑に落ちなかったので、

「知人、身内から借金をした憶えはない」

と、反論しに行った。相手夫婦はとぼけて、

「知りませんねぇ。貸したなんて言った憶えはありません」

と、言った。

五十年後の今も、彦一は時たま悪夢にうなされる。

「今日は支払日だ。金は？　明日の給料は？」

と目を醒ます。≪あゝ、夢でよかった。……≫。胸を撫で下ろすことがある。あの金地獄は生涯忘れることが出来ない。彦一はお金が一番こわい。人の本性を暴露させたり、迷わせたりするからである。

（つづく）

教育紙芝居のほんわかたのしい世界（４）

蒲原雅人

■タイトル「雪の女王」
■作者原作・アンデルセン
脚色・稲庭桂子　絵・いわさきちひろ
■制作・発行　童心社

■いわさきちひろの若いときの仕事であるが、こうして残っていることに特別な感慨を抱く。今回、『戦場のこどもたち』の絵本を示していわさきちひろの画業を簡単に説明してから紙芝居を始めた。対象の6年生たちは、真剣に紙芝居の世界に入ってきてくれたが、なによりそれは、このすばらしいというしかない絵のちからがあったからだと思う。
■フランスの女性画家マリー・ローランサンの画風を受け継ぎながらも、東洋の美を深く理解し、日本の政治的な反動期をしなやかに、かつ強靭に耐え抜いて確立された絵は、文字通りの風雪を経た強さを備えている。

■タイトル「王さまのながぐつ」
■作者　イタリア民話より
脚色・高橋五山
絵・いわさきちひろ
■制作・発行　童心社

■脚本が整理されていない。このまま読むと全体に統一感がなく、あいまいな印象しか残らないだろう。

●タイトルの「ながぐつ」は序盤だけで、あとは消えてしまう。仕方がないので、最後に子どもたちに「ながぐつはどこにいったと思う?」と問いかけ、「じつはいまもヨーロッパのノミの市で売られているらしいよ」と独自の落ちをつけた。こうでもしないと首尾一貫しない。
●途中、小人が登場するがいかにも不自然。これも仕方がないのでお姫さまは王さまからふしぎな指輪をあらかじめもらっていた、という流れにした。こういう細かいところで、子どもをなめてはいけない。
総じていえることは、この紙芝居シリーズは絵のグレードに比較して脚本の荒さが目立つ。せっかくの絵がもったいない。編集しっかりしろよ。